

# 傅玄「便宜五事」考

高橋 康 浩

## はじめに

曹魏・西晉に仕えた傅玄（二七〇―二七八年）は、多くの文章を著し、武帝司馬炎にたびたび上疏を行った。『晉書』卷四十七 傅玄傳は、本文の過半を上疏の内容が占め、それらはいずれも泰始年間（二六五―二七四年）前期という西晉草創期に呈されている。換言すれば、國家の政治方針を定める重要な時期のものであった。傅玄は西晉司馬氏政權の官僚として、どのように諸政策に携わったのであろうか。

本稿は、泰始四（二六八）年に傅玄が奉じた屯田・農事および異民族政策に関する具體的な五つの便宜、いわゆる「便宜五事」（以下、「便宜」と稱する）を取りあげる。西晉は後漢のように儒教を重視した國家であり、また、五胡十六國時代へと繋がる異民族が擡頭していくときでもある。この「便宜」の内容から、魏晉期の政治・制度が抱える問題点を照射するとともに、傅玄の政治思想および夷狄觀とその立脚するところを検討する。

## 一、典農官として

傳玄は字を休奕といい、涼州北地郡泥陽縣の人である。祖父の傳燮は後漢末に漢陽太守を務め、父の傳幹は曹魏に仕えて扶風太守となった。傳玄も曹魏で弘農太守、西晉で司隸校尉に就官していることから、北地の傳氏は「世々二千石」の家柄と言つてよい。<sup>(一)</sup> 曹魏末期に五等爵が建てられると、傳玄は男爵を授けられ、西晉建國後には子爵に進んだ〔晉書〕卷四十七 傳玄傳。泰始四（二六八）年に水害・旱魃が起こると、傳玄は五つの政策を上疏した。其一から其四までは屯田や農事・水利に關する内容である。其一から順番に検討していこう。

其の一に曰く、耕夫は多く種に務むれども耕<sup>か</sup> 嘆<sup>な</sup>れて熟せず、徒らに功力を喪<sup>うしな</sup>ひて收<sup>か</sup>むること無し。又舊<sup>も</sup>と兵の官牛を持つ者、官は六分を得、士は四分を得、自ら私牛を持つ者は、官と中分す。施行すること來久にして、衆心之に安んず。今一朝に減じて、官牛を持つ者、官は八分を得、士は二分を得たり。私牛を持つ及び牛無き者、官は七分を得、士は三分を得たり。人其の所を失へば、必ず歡樂せず。臣愚以爲へらく、宜しく佃兵の官牛を持つ者には四分を與へ、私牛を持つは官と中分すべし。さすれば則ち天下の兵は歡然<sup>な</sup>悅樂を作り、成穀を愛惜し、損棄の憂へ有る無し〔晉書〕卷四十七 傳玄傳。<sup>(二)</sup>

ここでは官に對して「士」と表現されているように軍士のことであり、それらが行う農事、すなわち軍屯について述べている。官牛を持つ者は官六士四、私牛を持つ者は官・士で中分するというのが從來の徵收率であつた。やがて、前者は官八士二、後者は官七士三というように、士への負擔が大きくなる。そのため、傳玄は徵收率を戻すよう主張したのである。

この提言は、傳玄が曹魏政權で典農校尉に就いたという経歴が背景にある。<sup>(三)</sup> 典農校尉は、典農中郎將・典農都尉などとともに屯田を管轄する典農官の一つで、諸官が置かれた地域には、民が耕作を行う典農部屯田、いわゆる民屯が存在した。やがて、『三國志』卷四 三少帝 陳留王 奐紀に、「是の歲、屯田官を罷めて以て政役を均しくし、諸典農は皆太守と爲し、都尉は

皆令長と爲す（是歲、罷屯田官以均政役、諸典農皆爲太守、都尉皆爲令長）とあり、『晉書』卷三 武帝紀の泰始二（二六六）年の條に、「十二月、農官を罷めて郡縣と爲す（十二月、罷農官爲郡縣）」とあるように、曹魏最末期から西晉初期にかけて、典農官は守令へ、屯田民も一般の郡縣民と負擔を同じくするようになり、民屯も廢止された。西晉は新たな土地制度として占田・課田制を導入するに至る。「便宜五事」を上疏した泰始四（二七三）年の時點で典農官と民屯はなくなっており、「便宜」其一も軍屯についての言及だが、好並隆司（一九五八）によれば、そもそも典農部屯田は軍糧生産を主とするが、軍事的要素を持たざるを得ず、その勞働力を農事と軍事とに合理的に統制するためであるという。また、竹園卓夫（一九七二）は、兵役を含む不定期の徭役に使役されるに至ったことを指摘する<sup>（四）</sup>。ならば、典農校尉としての政治經驗は軍屯に關する提言にも應用可能であらう。西嶋定生（一九五六）は、軍屯と典農部屯田の徵收率がおそらく同様であつたことを指摘する<sup>（五）</sup>。すなわち、傅玄は典農部屯田の徵收率に合わせて軍屯の徵收率を戻し、士の負擔輕減を訴えたのである。

次に擧げる「便宜」其二も農事に關しての地方官への訓戒である。

其の二に曰く、以ふに二千石は農に務むるの詔を奉ずると雖も、猶ほ心を勤めて以て地の利を盡くさず。昔漢氏は墾田の實ならざるを以て、徵して二千石を殺すこと十を以て數ふ。臣愚以爲へらく、宜しく漢氏の舊典を申べて、以て天下の郡縣を警戒し、皆死刑を以て之を督すべし（『晉書』卷四十七 傅玄傳<sup>（六）</sup>）。

當時、秩祿二千石相當の官は農事に務めるべき詔を受けても、それを行わなかった。遡れば、漢代では墾田の申告が實狀と違つていたため、多くの太守を處刑した。傅玄はこれに倣うことを提言したのである。この件は、『後漢書』本紀一下 光武帝紀下の建武十六年の條に、「秋九月、河南尹の張伋及び諸郡守十餘人、度田の實ならざるに坐し、皆獄に下されて死す（秋九月、河南尹張伋及諸郡守十餘人、坐度田不實、皆下獄死）」とあるのに基づく。この事件を『後漢書』からもう詳しく見ていく。

（建武）十三年、邑を増し、更めて竟陵侯に封ず。是の時、天下の墾田は多く實を以てせず、又戸口年紀は互ひに増減有り。十五年、詔して州郡に下して其の事を檢覈せしむるも、而るに刺史・太守は多く平均ならず。或ものは豪右を優饒し、羸

弱を侵刻したれば、百姓は嗟怨し、道を遮りて號呼す。時に諸郡各々使を遣はして事を奏せしむ。帝陳留の吏の牘の上に書有るを見、之を視るに云ふに、「潁川・弘農には問ふ可きも、河南・南陽には問ふ可からず」と。帝吏に由趣を詰すも、吏は服するを肯んぜず、<sup>あやむ</sup>抵<sup>あやむ</sup>きて長壽街上に於て之を得たりと言ふ。帝怒る。時に顯宗は東海公爲り、年十二。幄の後に在りて言ひて曰く、「吏は郡の敕を受け、當に墾田を以て相方べんと欲せしのみなるべし」と。帝曰く、「<sup>も</sup>即し此の如くんば、何の故にか河南・南陽には問ふ可からずと言ふ」と。對へて曰く、「河南は帝城にして、近臣多く、南陽は帝郷にして、近親多し。田宅は制を踰へ、準と爲す可からず」と。帝は虎賁將をして吏を詰問せしめるに、吏は乃ち實に首服すること、顯宗の對への如し。是に於て謁者を遣はして考實せしめ、具さに姦狀を知る。明年、隆は坐して徵せられて獄に下り、其の疇輩十餘人皆死す。帝隆は功臣なるを以て、特に免じて庶人と爲す（『後漢書』列傳十二劉隆傳<sup>七</sup>）。

後漢初期、墾田の申告が實狀と違つていたため、建武十五（三九）年に檢地を行うも、豪族の抵抗および官僚の不正により、民に多くの負擔がかかり、怨嗟の聲があがった。帝城の河南郡と帝郷の南陽郡では特にひどく、改めて調査し、不正の實態を知る。河南尹の張伋ら十數人の太守は死刑となり、南陽太守の劉隆も庶人に貶された<sup>八</sup>。なお、建武年間（二五～五六年）には同様の事件がたびたび起こり、王元（『後漢書』列傳三隗囂傳）、鮑永（同列傳十九鮑永傳）、李章（同列傳六十七酷吏李章傳）、牟長（同列傳六十九上儒林上牟長傳）らが「墾田不實」に坐して處分されるなど、枚舉にいとまがない。建國草創期の混亂ゆえにかかる不正が発生しやすかったのであろうか。度田政策について、小嶋茂稔（二〇〇二・二〇〇三）は、「少なくとも建武年間を通じて後漢の豪族層に対して無制限なまでの經濟的成長を許さないとする政治的姿勢は一貫しており、そのなかで度田政策は天下統一後に實施されたという點からも重要な位置を占める」と述べる<sup>九</sup>。ともあれ、後漢初期のような耕地申告の不正は、曹魏・西晉にかけても依然として存在したのである。

如上を踏まえて「便宜」其二を検討しよう。一般に「二千石」とは秩祿二千石の郡太守を指す。だが、當時の政治状況を見れば、單純にそれらを指すものではあるまい。

是れより先、諸典農各々吏民を部し、末作して生を治め、以て利人を要む。芝奏して曰く、「王者の治は、本を崇び末を抑へ、農に務め穀を重んず。王制に、『三年の儲無きは、國は其の國に非ざるなり』と。管子の區言穀を積むを以て急と爲す。方今、二虜未だ滅びず、師旅息はず。國家の要は、惟だ穀帛に在り。武皇帝特に屯田の官を開き、専ら農桑を以て業と爲す。建安中、天下の倉廩充實し、百姓殷足す。黃初より以來、諸典農に生を治め、各々部下の計を爲さしむを聽せり。誠に國家大體の宜しき所に非ざるなり。夫れ王者は海内を以て家と爲す。故に傳に曰く、『百姓足らざれば、君誰と與に足らん』と。富足の由は、天の時を失はずして地力を盡くすに在り。今商旅の求むる所、加倍の顯利有りと雖も、然れども一統の計に於て、已に不貲の損有り、墾田して一畝の收を益すに如かざるなり。夫れ農民の田に事ふるや、正月より耕種し、耘鋤し條桑し、耕糞し麥を種<sup>ま</sup>ゑ、穫刈し場を築き、十月にして乃ち畢る。廩を治めて橋を繋ぎ、租賦を運輸し、道を除きて梁を理め、室屋を埴塗し、是を以て歳を終へ、日に農事を爲さざること無きなり。今諸典農、各々言へらく、『留むる者は行者の爲に田計を宗とし、其の力を課すも、勢として爾らざるを得ず。廢する所有らざれば、則ち當に素より餘力あるべし』と。臣愚以爲へらく、宜しく復た農事を以て雜亂すべからず、専ら農桑を以て務めと爲し、國計に於て便と爲せ』と。明帝之に従ふ（『三國志』卷十二司馬芝傳<sup>(一〇)</sup>）。

文帝曹丕の黃初年間（二二〇～二二六年）以降、典農官は「末作治生」を認められた。本である農を措いて、末である商・工に務めて利殖を行うことが許されれば、農事を怠る者が現れたり、農事以外の負擔が屯田民にかかることは自明である。司馬芝の上疏は、そうした本末轉倒の状況を憂慮したものであり、明帝もかかる意見に従ったという。これがどこまで改善されたかは不明だが、藤家禮之助（一九六二）は、曹魏末期の屯田制の行き詰まりについて、「末作治生」が許されたことに遠因を求め、收穫高の減少が、官と中分するという定率徵收法ゆえに政府收入の減少に繋がり、屯田廢止の一理由となったとする<sup>(一一)</sup>。首肯し得る見解である。

以上を踏まえれば、「便宜」其二にいう二千石とは、主に官の廢止に伴い太守へと改められたかつての典農中郎將（秩祿二千



石）・典農校尉（秩祿比二千石）を指すものである。<sup>(二二)</sup> 自身も典農官であつた傳玄は、「末作治生」の状況とそれがもたらした結果を理解していた。二千石による不正を防止して農事に務めさせるため、光武帝に範を求め、嚴罰を以て監督すべきことを主張したのである。本を重視して生産力確保と收入向上をめざす傳玄の重農思想の一端をここに看取できよう。

## 二、水利と人事

「便宜」第三もまた農事に關係するものであり、特に水利についての見解を示す。

其の三に曰く、以ふに魏初 未だ意を水事に留めず。先に帝百揆を統べ、河堤を分かちて四部と爲し、本とを并せて凡そ五謁者とするは、水功至大にして、農事と並び興るを以て、一人の周くする所に非ざるが故なり。今謁者一人の力もて、天下の諸水を行るも、時に偏きを得ること無し。伏して見るに、河堤謁者の車誼は水勢を知らず。轉じて他職と爲し、更めて水を知る者を選びて之に代へ、分ちて五部と爲し、各々をして其の方宜を精らにせしめよ（『晉書』卷四十七傳玄傳<sup>(二三)</sup>）。

河堤謁者は、水利を管轄し陂池・河渠の保守を職掌とする。天下の河川を管轄するのは、「一人の周くする所に非ざる」ことゆえ、管轄區を分けて河堤謁者の定員を増やすよう求めた。傳玄の水利に關する見解を知る上で参考になるのが、魏晉交代期ごろに著したとされる『傳子』である。

陸田なる者、命は天に懸くるなり。人の力もて修むと雖も、苟くも水旱は時ならざれば、則ち一年の功棄てり。水田は之を制すること人に由り、人の力もて苟くも修むれば、則ち地の利は盡くす可し。天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず（『太平御覽』卷八百二十一 資産部一 田引『傳子』<sup>(二四)</sup>）。

水田を治めるのは人の力とし、その理念的根據として、『孟子』公孫丑下篇の「天時」「地利」「人和」を引く。『孟子』の本文では軍事を例にして三者の關係を説くが、傳玄はこれを援用し、最も大事な「人和」を以て水利を整えた田地の重要性を

主張する。これを踏まえれば、河堤謁者の増員は「人和」の重視する方策に則るものと言える。同時に傳玄は、現職の河堤謁者の車誼を更迭して水利に通じた者を就けるよう提言する。こうした人事思想は、「便宜」に先立って呈した上疏にも見られる。

臣聞くならく、舜は五臣を挙げ、無爲にして化し、人を用ひて其の要を得るなり。天下の羣司猥りに多く、審らかに其の人を得ざる可からざるなり。其の人を得ざること一日なれば、則ち損して貲あがなへず。況んや日を積かこめるをや。典謨に曰く、「庶官を曠むなしくする無かれ」とは、職の久しく廢す可からざるを言ふなり。諸れ疾病有ること滿百日にして差いえざれば、宜しく職を去らしめ、其の禮秩を優して之を寵存し、既に差えて後に更めて用ふべし。臣職を朝に廢さず、國官を曠むなしくするの累つらひ無きは、此れ王政の急なり（『晉書』卷四十七 傳玄傳）。

傳玄は『尚書』皐陶謨の「庶官を曠むなしくする無かれ」を典據として、適材適所の人事を行い、むだな官職をなくすよう主張した。加えて、拙稿（二〇一七）で指摘するように、『傳子』授職篇においてもやはり前述の『尚書』皐陶謨を引用して適材適所の人事の重要性を説く。つまり、水利に通じぬ車誼が河堤謁者に就官しているのは、この理念にもとることである。「便宜」其三は、如上の儒教經典に基づく提言であった。

續く「便宜」其四の内容を以下に挙げよう。これもまた農事および水利に關するものである。

其の四に曰く、古は歩百を以て畝と爲し、今は二百四十歩を以て一畝と爲し、覺る所倍に過ぐ。近ごろ魏初の田に課するや、其の頃畝を多くすることに務めず、但だ其の功力を修むることに務む。故に白田は收むること十餘斛に至り、水田は數十斛を收む。頃ちひらより以來、日ごとに田の頃畝の課を増し、而して田兵益々功を甚だしくし、修理する能はず。畝數斛にして已に還し、或いは以て種を償ふに足らざるに至る。曩むかし時と天地を異にし、災害に横遇するには非ざるなり。其の病は正しく務めて頃畝を多くするも功修めざるに在るのみ。竊かに見るに河堤謁者の石恢は甚だ水事及び田事に精鍊し、其の利害を知れり。乞ふらくは中書もて恢を召し、委曲に其の得失を問へ。必ずや補益する所有らん（『晉書』卷四十七 傳玄傳）。

前半部分は、西晉の占田・課田制を論じる際、必ずと言っていいほど引用される史料である。かかる制度に關してはすでに多くの先行研究があり、伊藤敏雄（一九八二）が諸説を整理・分類している<sup>（一八）</sup>。ただし、いずれが正解かは判断しがたく、本稿の目的も制度の解明にはない。

「便宜」其四には「田兵」とあることから、主に西晉の軍屯を述べたもので、それを曹魏の初期の屯田（ここでは民屯）と比較している。當初、曹魏は多くの收穫物を求める集約農法であったが、次第に耕地面積擴大へと移行した結果、收穫量が減少したという。岡崎文夫（一九三三）は、「田兵をして次第に無理な耕作を強制せしむるに至ったことを見るべ」きとし、注<sup>（一九）</sup>（五）所掲西嶋論文は、典農官の「末作治生」の影響を指摘するが、ともに妥當な見解である。あるいは、「末作治生」でなくとも、農事に悪影響を與えるほどの大きな負擔が田兵にかかっていたと考えられる。

これを踏まえて論じるならば、前述のとおり、後漢光武帝期には耕地面積の申告時に不正が行われた。曹魏後半期以降、典農官および屯田民が本末轉倒な状況下でいたずらに耕地面積擴大を圖れば、その不正と失敗が繰り返されたことは想像に難くない。「便宜」其四は、屯田民に農事以外の負擔をかけた「末作治生」に對する反省と警戒を込める。そして、その不正と失敗を防ぐための對策こそが、二千石を戒める「便宜」其二である。傳玄は收穫量を増やす方法として、水利・農事に通曉する河堤謁者の石恢を召し、詳しく得失を問うよう提案した。水利の重要性および適材適所の人材登用は「便宜」其三に見られたとおりで、これも經典の理念を現實政治に活かそうとするものであった。

以上、「便宜」其一から其四までを検討した。典農校尉としての經驗、後漢光武帝期の不正摘發に求めた範、そして儒教經典の理念に基づく提言が有機的に結びつく内容であり、これらは前掲した司馬芝の上疏に見える「王者の治」の理念を繼承するものと言つてよい。かかる特徴を持つ傳玄の「便宜」は後世に影響を與えた。それが以下に擧げる慕容皝の例である。

牧牛を以て貧家に給ひ、苑中に田す。公其の八を收め、二分もて私に入る。牛有りて地無き者も、亦た苑中に田し、公其の七を收め、三分もて私に入る。皝の記室參軍の封裕諫めて曰く、「臣聞くならく、聖王の國を宰するや、賦を薄



くして百姓に藏し、之に分かつに三等の田を以てし、十の一にして之を税す。……又事を量りて官を置き、官を量りて人を置き、官をして必ず須ふるに稱<sup>かな</sup>ひ、人位を虚しくせざらしめ、歳入の多少を度<sup>はか</sup>りて、裁ちて之を祿とす。百僚に供するの外は、之を太倉に藏すれば、三年の耕、一年の粟を餘す。斯を以て積めば、公何を用てか足らざらん。水旱は其れ百姓を如何せん。①農に務むるの令屢々發すと雖も、二千石の令長の、在公に勤むるを志し、地利に銳盡する者有ること莫し。故に漢祖は其の此の如きを知り、墾田の實ならざるを以て、徴<sup>ひ</sup>して二千石を殺すこと十を以て數ふ。是を以て明・章の際、號して升平に次ぐ。永嘉の喪亂より、百姓は流亡し、中原は蕭條とし、千里に煙無く、飢寒し流隕し、溝壑<sup>こうがく</sup>に相繼げり。……宜しく諸苑を省き罷め、以て流人に業とすべし。人至りて資産無き者は、之に賜ふに牧牛を以てす。人は既に殿下の人なれば、牛豈に失はんや。善く藏する者は百姓に藏すること、斯の若きのみ。邇<sup>ちか</sup>者、深く樂土の望に副へば、中國の人、皆將に壺餐奉迎せんとす。石季龍誰と與に居らんや。②且つ魏晉は道消の世と雖も、猶ほ百姓を削<sup>う</sup>ふこと七八に至らず、官牛と田を持つ者は、官は六分を得、百姓は四分を得たり。私牛ありて官田ある者は、官と中分すれば、百姓之に安んじ、人皆悅樂す。臣猶ほ明王の道に非ざるを曰ふ。而るを況んや増すをや。且つ水旱の厄は、堯・湯の免れざる所なり。王者は宜しく溝澮を濬治し、鄭白・西門・史起の溉灌の法に循ふべし。早あらば則ち溝を決して雨と爲し、水あれば則ち溝瀆に入る。上は雲漢の憂へ無く、下は昏墊の患へ無し。……〔晉書〕卷一百九慕容皝載記<sup>(三〇)</sup>。

慕容皝は五胡十六國の一つたる前燕（三三七～三七〇年）を建てた鮮卑族の人物である。その記室參軍を務めた漢人官僚の封裕<sup>(二二)</sup>は、八對二もしくは七對三の割合で收穫物を搾取する主君へ諫言を呈した。その際、①では、後漢光武帝期における太守の不正摘發に言及しており、これは傳玄の「便宜」其二を踏襲する。さらに②では、官牛・官田を有する者には官六民四、私牛・官田を有する者には官五民五の中分とすべきことを提示しており、かかる内容および文章は傳玄の「便宜」其一をなぞる。ただし、傳玄は「官・土」、封裕は「官・百姓」という違いがあり、民屯もすでに廢止された後の話だが、どちらも同じ徴収率であったことを示唆する。慕容皝は封裕の諫言を納れて農事に務めぬ二千石を處罰し、さらに、『晉書』卷一百九慕容

眇載記に、

苑囿は悉く之を罷めて、以て百姓の田業無き者に給す可し。貧者の全く資産無く、自ら存する能はざるは、各々牧牛一頭を賜ふ。若し私かに餘力有りて、官牛を取り官田を墾たがさんことを樂ねがふ者は、其れ魏晉の舊法に依る。……。

とあるように、「魏晉の舊法に依」つて對處した。これはおそらく西晉の占田・課田制に關連するもので、給田面積と收穫物の徵收率を指すのではあるまいか。いずれにせよ、封裕の諫言と慕容眇の返答からは、後漢に範を求めた傳玄の「便宜」に見える提言が、漢人官僚の封裕を通じて、異民族國家の前燕に傳わったことが分かる。

### 三、異民族政策と傳變

殘る「便宜」其五は、農事・水利と關係ない異民族政策を提示する。漢代に遡れば、傳玄の本貫の涼州北地郡は夷狄の脅威に何度もさらされた。例えば後漢桓帝期に特に隆盛した羌族の滇零は北地郡で天子を自稱し（『後漢書』列傳七十七 西羌傳）、靈帝期の末年には、鮮卑を隆盛させた檀石槐の子の和連が北地郡に侵入している（『三國志』卷三十 鮮卑傳）。また歴史的に見れば、傳玄の仕えた西晉は、八王の亂により國力を衰退させた後、夷狄に滅ぼされる。咸寧四（二七八）年に没した傳玄がそれを豫見していたかは不明だが、夷狄が憂慮すべき存在であったことは確かである。「便宜」其五にて開陳される異民族政策は次のとおりである。

其の五に曰く、「臣以爲へらく、①胡夷は獸心にして、華と同じからず。鮮卑最も甚だし。②本と鄧艾は苟くも一時の利を取らんと欲して、後患を慮らず。鮮卑數萬をして人間に散居せしむるは、此れ必ず害を爲すの勢なり。③秦州刺史の胡烈は素てより恩信を西方に有す。今烈往けば、諸胡已だ惡むこと無く、必ず且く消弭しょうみすと雖も、然れども獸心は保ち難く、必ずしも其れ久しく安んず可からざるなり。若し後に動釁有れば、烈の計能く之を制す。④惟だ恐るらくは胡虜

適々討撃に困しみ、便ち能く東のかた安定に入り、西のかた武威に赴き、外名は降を爲すも、動く可くんば復た動かん。此の二郡は烈の制する所に非ざれば、則ち惡胡の東西に窟穴浮游の地有り、故に復た患を爲し、以て之を禁ずること無きなり。⑤宜しく更めて一郡を高平川に置き、因りて安定西州の都尉をして徙るを樂ふの民を募らしめ、其の復除を重ねて以て之に充て、以て北道を通じ、漸く以て邊に實たすべし。⑥詳議して此の二郡及び新置の郡は、皆並びに秦州に屬せしめ、烈をして邊を御するの宜しきを専らにするを得しめよ」と〔晉書〕卷四十七 傅玄傳。

①傅玄は夷狄を禽獸と見なして華夷を明確に區別し、鮮卑を最大の脅威と捉える。②鄧艾の政策は後のことを考慮せぬ「一時の利」を取るものとし、夷狄を内地に雜住させる方針を批判した。鄧艾の異民族政策については後述しよう。③秦州刺史の胡烈は西方に恩信を有し、夷狄をおとなしくさせられるが、その獸心を必ずしも長く安定させ得るものではないという。換言すれば、傅玄は恩信に一定の効果を認めているのである。續いて、④夷狄が東の安定郡と西の武威郡に侵入し、表向きは降伏を示しつつも、機を見て叛くことを憂慮して、⑤新たに一郡を高平川に置き、安定西州の都尉に移住を望む民を募集させ、その者たちの賦税を免除して徐々に邊境に滿たすようにした。⑥かかる方策を整えた上で、胡烈に邊境防衛を取らせることを提言したのである。

これに對して、傅玄が名を擧げて批判した鄧艾の異民族政策とは次のようなものであった。

①戎狄は獸心にして、義を以て親まず、彊ければ則ち侵暴し、弱ければ則ち内附す。故に周宣に玁狁の寇有り、漢祖に平城の圍有り。匈奴一たび盛んなる毎に、前代の重患と爲る。②單于外に在りてより、能く牽制すること莫し。去卑誘ひて之を致し、來りて入侍せしむ。是れに由りて羌夷統を失ひ、合散するに主無し。單于内に在るを以て、萬里軌に順ふ。今單于の尊は日々に疏く、外土の威は浸々重く、さすれば則ち胡虜に深く備へざる可からざるなり。聞くならく、劉豹の部に叛胡有り。叛に因り割きて二國と爲して、以て其の勢を分かつ可し。去卑功は前朝に顯らかなるも、而るに子は業を繼がず。③宜しく其の子に顯號を加へ、鴈門に居らしむべし。離國して寇を弱め、舊勳を追録するは、此れ邊

を御するの長計なり」と。又陳べらく、「④羌胡民と處を同じくする者は、宜しく漸を以て之を出し、民の表に居らしめ、

廉恥の教を崇め、姦宄の路を塞ぐべし」と（『三國志』卷二十八鄧艾傳<sup>(二四)</sup>）。

鄧艾の上疏は嘉平元（二四九）年に爲された。①夷狄を禽獸と見なし、②匈奴の單于を内地に抑留し、③「離國」という分割支配を行うというものであった。④羌胡については漢民族と別居させるため、雜住している者を次第に外に徙すべきとする。

渡邊義浩（二〇〇九）は、鄧艾の異民族政策について、常に異民族を仲間割れに追い込み、強力な者を殺害するという曹操の政策を繼承するものであり、西晉の異民族政策に影響を与えたものと位置づける<sup>(二五)</sup>。傳玄と鄧艾はともに『春秋左氏傳』襄公四年

の「戎は禽獸なり」という夷狄觀に基づきつつ、傳玄は鮮卑對策を、鄧艾は匈奴・羌胡對策を示す。鄧艾は、匈奴に對しては單于を抑留させて統一性を削ぎ、羌胡に對しては内地に雜住する者を徐々に追い出すことを主張したが、傳玄はこの雜居を「一時の利」を取るものと批判した。そして恩信の有效性を一定程度認めつつも、國境に新郡を設けて鮮卑を内地へ入れぬ政策を提言したのである。

かかる傳玄の異民族政策は、祖父傳燮に淵源を求めることができる。後漢の靈帝期、傳燮は異民族政策を開陳した。『後漢

書』列傳八十烏桓鮮卑傳の論で范曄が總括するように、當時、最も凶暴であった異民族は羌、ついで烏桓と鮮卑であった<sup>(二六)</sup>。

羌族に悩まされた後漢では、頻繁に侵攻を受けた涼州を棄てるべく「涼州放棄論」が三度も提出されるが、傳燮はこれに猛反對した<sup>(二七)</sup>。

司徒の崔烈以爲へらく、「宜しく涼州を弃つべし」と。……帝以て（傳燮）に問ふ。燮對へて曰く、「昔、冒頓の至逆なるや、

樊噲は上將爲りしが、十萬の衆を得て匈奴中を横行せんと願ふ。憤激して奮はんことを思ひ、未だ人臣の節を失はず。顧

みるに計の當に従ふべきや不<sup>い</sup>なるのみなりしも、季布は猶ほ『噲斬る可きなり』と曰ふ。今、涼州は天下の要衝にし

て、國家の藩衛なり。高祖初めて興るや、酈商をして別に隴右を定めしむ。世宗境を拓きて、四郡を列置し、議者以爲

へらく、『匈奴の右臂を斷てり』と。今、牧御和を失ひて、一州をして叛逆せしめ、海内は之が爲に騒動し、陛下は臥す

るも安らかに寝ねず。烈は宰相と爲るも、国の爲に之を弭<sup>やす</sup>ずる所以の策を思はんことを念ぜず、乃ち一方萬里の土を割き棄てんと欲す。臣竊かに之に惑ふ。若し左衽の虜をして此の地に居ることを得しむれば、士は勁く甲は堅く、因りて以て亂を爲さん。此れ天下の至慮にして、社稷の深憂なり。若し烈之を知らざれば、是れ極蔽なり。知りて故に言へば、是れ不忠なり」と。帝燮の議に従ふ（『後漢書』列傳四十八 傅燮傳<sup>(二八)</sup>）。

傍線部に注目したい。涼州は要衝かつ國家の重要な防衛據點であり、かつて前漢の高祖が隴右を平定し、武帝が邊境を開拓して河西四郡を列ねたようなものであること、もし涼州を放棄すれば、夷狄がこの地を占領し、漢に對して亂を起こすであろうことを指摘する。もちろん、傅燮の本貫が涼州北地郡であったことは放棄反對の大きな理由である。ともあれ、傅燮は涼州という要衝を確保して夷狄の侵入を防ぐことを主張した。これは防衛據點となる新郡を設けて鮮卑の侵入を防ぐ傅玄の政策と共通しよう。

ところで、傅玄の提言は鄧艾のように羌・胡・匈奴を対象としなかった。少なくとも後漢時代に本貫を侵した羌に對して何らかの言及があつても良さそうだが、特に觸れていない。匈奴のことは不明だが、羌・胡についてはやはり傅燮に理由を求められる。

初め、郡將の范津人を明知し、燮を孝廉に擧ぐ。津漢陽と爲り、燮と交代するに及び、符を合して去る。鄉邦之を榮とす。津字は文淵、南陽の人なり。燮善く人に卹し、叛羌其の恩化に懷きて、並びに來たりて降附す。乃ち廣く屯田を開き、四十餘營を列置す（『後漢書』列傳四十八 傅燮傳<sup>(二九)</sup>）。

傅燮は漢陽太守に赴任して人々に惠恤を施したところ、叛亂を起こした羌族がその恩化に懷いて降伏してきたという。恩を以てすれば、後漢にとつて最も凶惡な夷狄ですら懷柔し得ることを示した。さらに、傅燮が漢陽太守を務めていた中平四（一八七）年、邊章・韓遂の亂が起き、韓遂に城を包圍されたことがあつた。

賊遂に進みて漢陽を圍む。城中は兵少なくて糧盡くも、燮は猶ほ固守す。時に北地の胡騎數千、賊に隨ひて郡を攻む



るも、皆夙に變の恩に懷けば、共に城外に於て叩頭し、變を送りて郷里に帰らんことを求む。子の幹、年十三にして、従ひて官舎に在り。變の性の剛にして高義有るを知れば、志を屈して以て免るる能はざらんことを恐れ、進み諫めて曰く、

「國家昏亂し、遂に大人をして朝に容れざらしむ。今、天下已に叛き、而して兵自守するに足らず。郷里の羌胡先に恩徳を被むれば、郡を弃てて帰らしめんと欲す。願はくは必ず之を許せ。徐ろに郷里に至り、義徒を率ゐる厲まし、有道を見て之を輔けて、以て天下を濟へ」と〔後漢書 列傳四十八 傳變傳〕。

韓遂に命じられて攻めてきた胡族の騎兵は、平素より傳變の恩徳を慕っていたために叩頭し、卻つて傳變の歸郷のために助力を申し出たのである。ちなみに、子の傳幹も父に歸郷を促したが、傳變はそれを斷わつて戦死を遂げる。傳玄は「便宜」其五にて羌・胡の對策を提言しなかつた背景には、羌・胡が祖父傳變の恩徳を慕つて懷いたこと、胡に至つては傳變の命を救おうとしたことが根底にあると考え得る。傳玄にとつて羌・胡は恩徳を以て懷柔し得る存在であつた。これを踏まえれば、傳玄が西方に恩信を有する胡烈を登用するところも、傳變の異民族政策に倣つたものと言えよう。ただし、胡烈は泰始六（二七〇）年六月に鮮卑の樹機能と戦つて敗死している（『晉書』卷三 武帝紀・『資治通鑑』卷七十九 晉紀一世祖武皇帝上之上）。鮮卑を警戒した傳玄は炯眼であつた。

なお、傳變の没年の中平四（二八七）年から傳玄の生年の建安二十二（二二七）年までは三十年、そこから「便宜五事」を上疏した泰始四（二六八）年までは、さらに約五十年の開きがある。したがつて、傳玄は祖父の發言や政策を直接見聞したわけではない。しかし、傳玄は自著『傳子』の中で傳變を含めた傳氏一族の傳記を著している〔三二〕。當然、祖父の生涯・言行・事蹟を取材したはずであり、その異民族政策を知らぬことはあり得まい。恩信の有効性とその限界を理解し、邊境の要衝を固めて鮮卑を内地に侵入させないようにする傳玄の政策は、祖父傳變に影響を受けたものであつた。

傳玄が「便宜五事」を上疏してから四年後の泰始八（二七二）年、阮种が對策を上疏し（『晉書』卷五十二 阮种傳）、それから約二十七年後の元康九（二九九）年、江統が「徙戎論」を提出した（『晉書』卷五十六 江統傳）。注（二五）所掲渡邊論文によれば、前

者は、『春秋左氏傳』僖公七年の「遠きを懷くるに徳を以てす（懷遠以德）」を典據とし、異民族と戦うことを避けて共存・融和を圖る方策であり、武帝期の基本方針とされた。後者は、中華に入り込んだ異民族を徐々に國外に追い出すべしという方策で、惠帝期以後の基本方針となり、鄧艾の上疏に倣ったものであるという。傳玄の「便宜」其五で示される異民族政策は、祖父傳燮に倣うものであった。鮮卑への警戒という點では情勢を的確に見抜いており、恩信という徳による懷柔を認める點に關しては阮种の對策の思想的先驅と位置づけることができるのである。

## おわりに

傳玄が泰始四（二六八）年に上疏した「便宜五事」は、其一に、軍屯における徵收率を戻して軍士への負擔を減らすべきことを主張する。其二に、後漢光武帝期における檢地の不正摘發を範とし、郡太守および舊典農官に農事を獎勵し不正を犯した際の嚴罰適用を求める。其三に、『孟子』の「人和」および『尚書』皐陶謨に基づく適材適所の理念を根底にして、河堤謁者の増員および水利に通じる者の登用を提案する。其四に、集約農法から耕地面積擴大へと路線を變更したことによる收入減、および典農官の「末作治生」により引き起こされた曹魏の失敗の反省を説く。其五に、後漢末に異民族政策を開陳して恩徳により羌・胡を懷柔した祖父傳燮に倣う政策の提言であった。すなわち、曹魏の政策を總括した其一・其二・其四、後漢に範を求めた其二・其五、儒教經典に基づく其三・其四、と分類することができる。これらを上疏した結果、武帝より次のような詔が下されて贊辭を受けた。

陳ぶる所の便宜を得、農事の得失及び水官の興廢、又邊を安んじ胡を御し、政事の寬猛の宜しきを言ふに、申省周く備はり、一二して之を具ふ。此れ誠に國の大本爲りて、當今の急務なり。論ずる所の如きは皆善く、深く乃が心なんぢを知れり。廣く諸々の宜しきを思ひ、動靜以て聞こゆるなり（『晉書』卷四十七 傳玄傳<sup>（三三）</sup>）。

武帝による評價の言葉に「政事の寛猛の宜しきを言ふ」とあり、かかる恩恵と威刑のバランスがとれた政治は、傳玄の理想とするものであった。<sup>(三三)</sup> 傳玄の死から數十年経った五胡十六國時代の前燕において、封裕が傳玄の「便宜五事」を踏まえた内容を以て主君の慕容皝に諫言を呈し、慕容皝もそれを受け入れて政治を改める。鮮卑を最大の脅威と見なしていた傳玄にとつては皮肉かも知れない。ともあれ、傳玄の「便宜五事」は、漢魏の政治を總括した上で、西晉の屯田策および異民族政策に一つ  
の方向性を示したものであった。

《注》

- (一) 『意林』卷五引「傅子」には、「傅氏之先、出自陶唐、傳說之後」とある。傅玄は一族の出自を堯・舜に求め、傳說を遠祖とした。また、本貫を同じくする一族があり、三國曹魏に仕えたものとしては傳綰がいる(『三國志』卷二十一 傳綰傳)。
- (二) 其一日、耕夫務多種而耕嘆不熟、徒費功力而無收。又舊兵持官牛者、官得六分、士得四分。自持私牛者、與官中分。施行來久、衆心安之。今一朝減、持官牛者、官得八分、士得二分。持私牛及無牛者、官得七分、士得三分。人失其所、必不歡樂。臣愚以爲、宜佃兵持官牛者與四分、持私牛與官中分、則天下兵作歡然悅樂、愛惜成穀、無有損棄之憂(『晉書』卷四十七 傅玄傳)。
- (三) 『晉書』の本傳によれば、傅玄は弘農太守に就いたときに典農校尉を兼任した。正確な就官年は不明だが、曹魏末期のことである。本來、軍屯を管轄する官としては、度支尚書・度支中郎將・度支校尉等の度支官が存在した。
- (四) 好並隆司「曹魏屯田に於ける方格地割制」(『歴史學研究』二二四、一九五八年十月) および、竹園卓夫「魏の典農部屯田についての一考察」(『集刊東洋學』二八、一九七二年十月)を参照。また、石井仁「魏の武帝 曹操」(『新人物文庫』二〇〇九年)『曹操―魏の武帝』、新人物往來社、二〇〇〇年に加筆したもの)は、典農官を田官と呼稱し、「田官には中郎將や校尉などの武官職があてられたから、軍隊の指揮・命令系統を應用していたことがわかる」と述べる。典農部屯田が軍事的性質を有することは間違いないまい。一方で、注(二九)所引の『後漢書』列傳四十八 傅燮傳によれば、傅玄の祖父傅燮は屯田を行っており、これが傅玄の提言に關係している可能性もある。
- (五) 西嶋定生「魏の屯田制」(『東洋文化研究所紀要』一〇、一九五六年十月。一九六五年十二月に改訂したものを、『中國經濟史研究』、東京大学出版會、一九六六年に所収)。本稿は改訂版を参照した。
- (六) 其二曰、以二千石雖奉務農之詔、猶不勤心以盡地利。昔漢氏以墾田不實、徵殺二千石以十數。臣愚以爲宜申漢氏舊典、以警戒天下郡縣、皆以死刑督之(『晉書』卷四十七 傅玄傳)。
- (七) (建武)十三年、増邑、更封竟陵侯。是時、天下墾田多不以實、又戶口年紀互有増減。十五年、詔下州郡檢察其事、而刺史・太守多不平均。或優饒豪右、侵刻羸弱、百姓嗟怨、遮道號呼。時諸郡各遣使奏事。帝見陳留史牘上有書、視之云、潁川・弘農可問、河南・南陽不可問。帝詰吏由趣、吏不肯服、抵言於長壽街上得之。帝怒。時顯宗爲東海公、年十二。在輶後言曰、吏受郡敕、當欲以墾田相方耳。帝曰、即如此、何故言河南・南陽不可問。對曰、河南帝城、多近臣。南陽帝鄉、多近親。田宅踰制、不可爲準。帝令虎賁將詰問吏、吏乃實首服、如顯宗對。於是遣謁者考實、具知姦狀。明年、隆坐徵下獄、其疇輩十餘人皆死。帝以隆功臣、特免爲庶人(『後漢書』列傳十二 劉隆傳)。
- (八) 渡邊義浩「官僚」(『後漢國家の支配と儒教』、雄山閣出版、一九九五年に所収)は、後漢政權樞要官の地域性を検討し、後漢初期には荊州南陽郡の官僚を優先的に登用していたこと、それに次いで司隸河南郡が優遇されていたことを論じている。
- (九) 小嶋茂稔「建武度田政策始末攷(上)」(『後漢の建國期における國家と社會』)、『山形大學紀要(社會科學)』三三一、二〇〇二年七月) および「建武度田政策始末攷(下)」(『後漢の建國期における國家と社會』)、『山形大學紀要(社會科學)』三三二、二〇〇三年二月)。
- (一〇) 先是、諸典農各部吏民、未作治生、以要利入。芝奏曰、王者之治、崇本抑末、務農重穀。王制、無三年之儲、國非其國也。管子區言、以積穀爲急。方今二虜未滅、師旅不息、國家之要、惟在穀帛。武皇帝特開屯田之官、專以農桑爲業。建安中、天下倉廩充實、百姓殷足。自黃初以來、聽諸典農治生、各爲部下之計、誠非國家大體所宜也。夫王者以海內爲家、故傳曰、百姓不足、君誰與足。富足之田、在於不失天時而盡地利。今商旅所求、雖有加倍之顯利、然於一統之計、已有不貲之損、不如墾田益一畝之收也。夫農氏之事田、自正月耕種、耘鋤條桑、耕種種麥、穫刈築場、十月乃畢。治廩繫橋、運輸租賦、除道理梁、塹塗室屋、以是終歲、無日不爲農事也。今諸典農、各言、留者爲行者宗田計、課其力、勢不得不爾。不有所廢、則當素有餘力。臣愚以爲、不宜復以商事雜亂、專以農桑爲務、於國計爲便。明帝從之(『三國志』卷十二 司馬芝傳)。
- (一一) 藤家禮之助「曹魏の典農部屯田の消長」(『東洋學報』四五―二、一九六二年九月)、『漢三國兩晉南朝の田制と税制』、東海大學出版會、一九八九年に所収)。

- (一二) 『後漢書』志二十六百官三大司農の注に引く『魏志』には、「曹公置典農中郎將、秩二千石。典農校尉、秩比二千石」とある。
- (一三) 其三曰、以魏初未留意於水事、先帝統百揆、分河堤爲四部、并本凡五謁者、以水功至大、與農事並興、非一人所周故也。今謁者一人之力、行天下諸水、無時得偏。伏見河堤謁者車誼不知水勢、轉爲他職、更選知水者代之、可分爲五部、使各精其方宜。〔晉書〕卷四十七 傅玄傳。
- (一四) 陸田者、命懸於天也。人力雖修、苟水旱不時、則一年之功棄矣。水田制之由人、人力苟修、則地利可盡、天時不如地利、地利不如人和。〔太平御覽〕卷八百二十一 資產部一田引『傅子』。なお、『傅子』の成書年代は不詳であり、吳婉霞『傅玄及『傅子』研究』(中國政法大學出版社、二〇一五年)は、およそ魏晉交代期ごろに著作したと推測する。『晉書』本傳によれば、『傅子』は「數十萬言」に及んだとあることから、長期に渡って執筆されたのであろう。
- (一五) 臣聞舜舉五臣、無爲而化、用人得其要也。天下羣司猥多、不可不審得其人也。不得其人、一日則損不貲、況積日乎。典謨曰、無曠庶官、言職之不可久廢也。諸有疾病滿百日不差、宜令去職、優其禮秩而寵存之、既差而後更用。臣不廢職於朝、國無曠官之累、此王政之急也。〔晉書〕卷四十七 傅玄傳。
- (一六) 拙稿『傅玄「傅子」の治國・人事思想』(『三國志研究』一二、二〇一七年九月)。
- (一七) 其四曰、古以步百爲畝、今以二百四十步爲一畝、所覺過倍。近魏初課田、不務多其頃畝、但務修其功力、故白田收至十餘斛、水田收數十斛。自頃以來、日增田頃畝之課、而田兵益甚、功不能修理、至畝數斛已還、或不足以償種。非與曩時異天地、横遇災害也、其病正在於務多頃畝而功不修耳。竊見河堤謁者石恢甚精練水事及田事、知其利害、乞中書召恢、委曲問其得失、必有所補益。〔晉書〕卷四十七 傅玄傳。
- (一八) 伊藤敏雄は、西晉の占田・課田制に關する論について、占田と課田とがそれぞれ異なる農民を對象とするA説、占田と課田とがそれぞれ同一戸内の異なる民を對象とするB1説、占田と課田とがともに同一の民を對象とし、課田が占田内に包括されるとするB2説、占田と課田とがともに同一の民(特に戸主)を對象とし、課田を占田の外に設定するB3説の四つに大別する。詳しくは、伊藤敏夫「西晉の占田・課田制の再檢討」(『中國古代史研究』第五、雄山閣出版、一九八二年)を參照。
- (一九) 岡崎文夫「魏晉南北朝を通じて北支那に於ける田土問題綱要」(『支那學』六一三、一九三二年七月)、『南北朝に於ける社會經濟制度』、弘文堂書房、一九三五年に所收。一九六七年新裝版發行)。
- (二〇) 以牧牛給貧家、田于苑中、公收其八二分入私。有牛而無地者、亦田苑中、公收其七三分入私。號記室參軍封裕諫曰、臣聞聖王之宰國也、薄賦而藏於百姓、分之以三等之田、十一而稅之。……又量事置官、量官置人、使官必稱須、人不虛位、度歲入多少、裁而祿之。供百僚之外、藏之太倉、三年之耕、餘一年之粟。以斯而積、公用於何不足。水旱其如百姓何。雖務農之令屢發、二千石令長莫有志勤在公、銳盡地利者。故漢祖知其如此、以墾田不實、徵殺二千石以十數。是以明章之際、號次升平。自永嘉喪亂、百姓流亡、中原蕭條、千里無煙、飢寒流隕、相繼溝壑。……宜省罷諸苑、以業流人。人至而無資產者、賜之以牧牛。人既殿下之人、牛豈失乎。善藏者藏於百姓、若斯而已矣。邇者深副樂土之望、中國之人皆將壺餐奉迎、石季龍誰與居乎。且魏晉雖道消之世、猶削百姓不至於七八、持官牛田者官得六分、百姓得四分、私牛而官田者與官中分、百姓安之、人皆悅樂。臣猶曰非明王之道、而況增乎。且水旱之厄、堯湯所不免、王者宜濬治溝澮、循鄭白、西門、史起溉灌之法、早則決溝爲雨、水則入於溝瀆、上無雲漢之憂、下無昏墊之患。……〔晉書〕卷一百九 慕容皝載記)。
- (二一) 『資治通鑑』卷八十八 晉紀十 孝愍皇帝上によれば、封裕は封抽の子であり、卷八十七 晉紀九 孝懷皇帝中によれば、封抽の父は西晉で東夷校尉となった渤海の封釋である。
- (二二) 苑囿悉可罷之、以給百姓無田業者。貧者全無資產、不能自存、各賜牧牛一頭。若私有餘力、樂取官牛墾官田者、其依魏晉舊法。〔晉書〕卷一百九 慕容皝載記)。
- (二三) 其五曰、臣以爲、①胡夷獸心、不與華同、鮮卑最甚。②本鄧艾苟欲取一時之利、不慮後患、使鮮卑數萬散居人間、此必爲害之勢也。③秦州刺史胡烈素有恩信於西方。今烈往、諸胡雖已無惡、必且消弭、然獸心難保、不必其可久安也。若後有動變、烈計能制之。④惟恐胡虜適困於討擊、便能東入安定、西赴武威、外名爲降、可動復動。此二郡非列所制、則惡胡東西有窟穴浮游之地、故復爲患、無以禁之也。⑤宜更置一郡於高平川、因安定西州都尉募樂徙民、重其復除以充之、以通北道、漸以實邊。⑥詳議此二郡及新置郡、皆使并屬秦州、令烈得專御邊之宜。〔晉書〕卷四十七 傅玄傳。
- (二四) ①戎狄獸心、不以義親、強則侵暴、弱則內附、故周宣有玁狁之寇、漢祖有平城之圍。每匈奴一盛、爲前代重患。②自單于在外、莫能牽制去卑。誘而致之、使來入侍。由是羌夷失統、合散無主。以單于在內、萬里順軌。今單于之尊日疏、外土之威浸重、則胡虜不可不深備也。聞劉豹部有叛胡、可因叛割爲二國、以分其勢。



去卑功顯前朝、而子不繼業。<sup>③</sup>宜加其子顯號、使居鴈門。離國弱寇、追錄舊勳、此御邊長計也。又陳、<sup>④</sup>羌胡與民同處者、宜以漸出之、使居民表崇廉恥之教、塞姦宄之路（『三國志』卷二十八 鄧艾傳）。

(二五) 渡邊義浩「西晉における華夷思想の變容」（『大東文化大學漢學會誌』四八、二〇〇九年三月）。「華夷思想」と「徙戎論」と改題して、『西晉「儒教國家」と貴族制」、汲古書院、二〇一〇年に所収。

(二六) 『後漢書』列傳八十 烏桓鮮卑傳の論に、「論曰、四夷之暴、其執互彊矣。匈奴熾於隆漢、西羌猛於中興、而靈獻之間、二虜迭盛」とある。前漢では匈奴が脅威であったが、後漢では羌が猛威を振るい、靈帝・獻帝の後漢末期では烏桓・鮮卑の二虜が盛んであったとする。

(二七) 後漢の異民族政策と「涼州放棄論」については、渡邊義浩「後漢の羌 鮮卑政策と董卓」（『三國志研究』一〇、二〇一五年九月）『三國時代よりみた邪馬臺國』、汲古書院、二〇一六年に所収。

(二八) 司徒崔烈以爲、宜弃涼州。……帝以問變。變對曰、昔、冒頓至逆也、樊噲爲上將、願得十萬衆橫行匈奴中。憤激思奮、未失人臣之節、顧計當從與不耳、季布猶曰噲可斬也。今涼州天下要衝、國家藩衛。高祖初興、使酈商別定隴右。世宗拓境、列置四郡、議者以爲、斷匈奴右臂。今牧御失和、使一州叛逆、海內爲之騷動、陛下臥不安寢。烈爲宰相、不念爲國思所以弭之之策、乃欲割弃一方萬里之土。臣竊惑之。若使左衽之虜得居此地、士勁甲堅、因以爲亂。此天下之至慮、社稷之深憂也。若烈不知之、是極蔽也。知而故言、是不忠也。帝從變議（『後漢書』列傳四十八 傅燮傳）。

(二九) 初、郡將范津明知人、舉燮孝廉。及津爲漢陽、与燮交代、合符而去。鄉邦榮之。津字文淵、南陽人。燮善卹人、叛羌懷其恩化、竝來降附。乃廣開屯田、列置四十餘營（『後漢書』列傳四十八 傅燮傳）。

(三〇) 賊遂進開漢陽。城中兵少糧盡、燮猶固守。時北地胡騎數千、隨賊攻郡、皆夙懷燮恩、共於城外叩頭、求送燮歸鄉里。子幹、年十三、從在官舍。知燮性剛有高義、恐不能屈志以免、進諫曰、國家昏亂、遂令大人不容於朝。今、天下已叛、而兵不足自守。鄉里羌胡先被恩德、欲令弃郡而歸。願必許之。徐至鄉里、率厲義徒、見有道而輔之、以濟天下（『後漢書』列傳四十八 傅燮傳）。この他の後漢における「恩信」を用いた反亂平定については、長谷川隆一「後漢時代における反亂の平定——「恩信」を媒介として——」（『學習院史學』五五、二〇一七年三月）を参照。

(三一) 『傅子』は宋代以降に散逸しており、現行本『傅子』の傅燮傳は、「傅燮字南容、奉寡嫂甚謹、食孤侄如赤子」というごくわずかな文しか残存していない。なお、『傅子』の篇名・内容についての詳しい考察は、劉治立『《傅子》評注』（天津古籍出版社、二〇一〇年）を参照。

(三二) 詔曰、得所陳便宜、言農事得失及水官興廢、又安邊御胡政事寬猛之宜、申省周備、一二具之、此誠爲國大本、當今急務也。如所論皆善、深知乃心。廣思諸宜、動靜以聞也（『晉書』卷四十七 傅玄傳）。

(三三) 傅玄は、『傅子』治體篇の中で、『春秋左氏傳』昭公二十二年の「寬猛相濟」に基づく「德威相濟」を自らの政治理念として掲げている。詳しくは注（一六）所掲の拙稿を参照。

